三回忌を迎えて

瀬尾　まなほ

「死んだら終わり」と瀬戸内寂聴先生はよく言っていた。どんなに偉い人でも、死んだら世間から忘れられてしまう、と。

自分の作品が後世に残るような生き方をした人は羨ましい。作家や芸術家、俳優や歌手、建築家、デザイナーなど、自分が手掛けたものが自身の死後もこの世に生き続ける。

先生が亡くなって今年で三回忌を迎える。亡くなって丸二年経って、私は何か少しでも強くなって、成長できたのだろうか。あのときから何も変わっていない気がして、まだまだ先生を想う気持ちが薄まらなくて、いつもさみしくて、夢に出てきてと、どこかで会いたいと願う日々で。

先生から離れられずにいる。

肩書が「瀬戸内寂聴秘書」から「瀬戸内寂聴元秘書」になって、私は何者でもなくなった。その肩書にさえ、先生が死んだことを思い知らされて辛くなったりした。自分の意義や、「誰かのために」といった私が一番力を発揮できるその想いさえ失って、虚しさが私を包み込んだ。

そんな中でも、著作物に関する先生の仕事の依頼が来る度、先生がまだ世の中で必要とされている実感がもてて嬉しかった。

この二年の間、たくさんの先生の本が出た。編集者の方が、まだこの世に出ていないエッセイを集めて出そうとしてくださったり、以前出版されたものを、よりよいものにしてくださったりしている。「亡くなった直後は一気に本

も売れるし、出るけれど、そこで終わりではなくて、細く、長く先生の本を出していきたい」と言って下さったその言葉に、「先生聞いてる?」と思わず空に向かって叫びたくなった。先生のことを今も思い続けているのは私だけでなくて、たくさんの人が先生のためにがんばってくれていること、何より心強かった。

「死んだら終わり」ってまだまだ終わらないよ、先生。

寂庵のお詣りに来られた方々へ、私が先生との思い出を話す機会をいただいた。

「生前法話に参加したかったけれど、なかなか抽選にあたらずやっと来れてうれしい。」

「お堂に参らせてもらって、寂聴さんの写真を見るだけですごくパワーを貰えた。」

「こうして寂聴さんについての話が直に聞けて嬉しいし、今後も続けてほしい。」

など、想像以上に喜んでいただけた。写真を見ただけでパワー貰えたって、先生すごくない?

先生のことを今でもこんなにたくさんの方々が慕ってくださり、遠方から足を運び、拝んで下さる。その光景に私は胸がいっぱいになった。

自信を喪失していた私も、自分の意味、価値って自分で決めるものではないなと思った。こうして私の話を聞きたいと言ってくださる方もたくさんいて、あぁ、私頑張ろうって……。

講演中、何度も思いが溢れて泣いてしまう。その都度、聴衆の優しい眼差しに救われた。

私の家にはあらゆるところに先生の写真が飾られている。洗面所の鏡に、先生とのツーショットの雑誌の切り抜きを張っていたら、友人に笑われた。本当にあらゆるところすぎる。

「徹子の部屋」に出演した際に戴いた、先生の大きな写真のパネルも寝室に飾ってあり、子どもたちがものすごい寝相で寝ているのを日々見守ってくれている。そう、いつでも私には先生がいる。

先生が溺愛していた長男は二歳を迎える前に、先生と永遠のさよならをした。しゃべれなかった長男が、今は「あんちゃん（庵主からとった先生のニックネーム）は遠い、遠いお空にいるの?飛行機だったら会える?」、「あんちゃんはなんで死んじゃったの?」と聞いてくる。この前なんて、一緒にバナナジュースを作ったら「あんちゃんにあげ

たら元気になるよ！恐竜の絵本も見せてあげる」なんて言うもんだから泣けてきた。

先生を想い続けることは、未練がましいとか、そろそろ切り替えないととか、そんなふうに考えたこともあったけれど、そんなの無理だァ。

先生のことを想うと泣きたくもなるけれど、それと同じように楽しかった日々を思い出す。私が大好きな先生のことを今も誰かが大切に思ってくれたら、それでもっと嬉しくなる。

こうして、ずっと私は生きていこう。そんな風に思う、先生の三回忌。

サガノ・サンガでお詣りする瀬尾さんの長男